

# 人権作文の部

|                         |    |
|-------------------------|----|
| みんなにやさしく……………           | 2  |
| ともだち……………               | 4  |
| じぶんらしくいきること……………        | 6  |
| 友だちとなかよくするために……………      | 8  |
| 友だちを大切にしたい……………         | 10 |
| なんでもおたすけたい……………         | 12 |
| みんなちがってみんないい……………       | 14 |
| おばちゃん……………              | 16 |
| わたしは、左きき……………           | 18 |
| 障がい者ってかわいそうなの？……………     | 20 |
| 自分らしく……………              | 22 |
| きずつく言葉からぼくが考えたこと……………   | 24 |
| 身近な思いやり……………            | 26 |
| 人権について……………             | 28 |
| 大切なこと……………              | 30 |
| 友だちと仲良くするために……………       | 32 |
| 言葉づかい……………              | 34 |
| 普通に接する……………             | 36 |
| おとうと……………               | 38 |
| 優しいうそ……………              | 40 |
| 最期の人権……………              | 42 |
| 命を愛すること……………            | 44 |
| 迅くん、生まれてきてくれてありがとう…………… | 46 |
| 「普通」とは何か……………           | 48 |
| 「自分らしさ」が生きる未来へ……………     | 50 |
| 灰色と青……………               | 52 |
| イスラム教と私……………            | 54 |

# みんなにやさしく

「やさしくするってどんなことかな。」

と、たんにんのせんせいがいいました。みんなは、

「ともだちに、いっしょにあそぼうっていうこと。」

とか、

「おうちでおてつだいをすること。」

といっていました。わたしは、ともだちがいないるときに、「どうしたの。」ときくことだとおもいました。

それからせんせいは、『みんなにやさしく』というほんをしょうかいしました。タニーシャというおんなのこが、みんなのまえでジュースをこぼ

してしまうそうです。

「みんなだったら、どんなきもちになるかな。」

と、せんせいがききました。わたしだったら、とてもはずかしくて、かたまってしまいかもしれません。

「そんなおともだちがいたとき、みんなならどうするか、かんがえながらきいてね。」

と、せんせいはいって、よんでくれました。

ジュースをこぼして、みんなにわらわれたタニーシャは、きょうしつをでていきました。でも、しゅじんこうのおんなのこは、タニーシャになにができたのだろうか、いろいろとかんがえ

ていました。それをみて、わたしは、とてもやさしいなとおもいました。わたしだったら、まわりのともだちに、

「わらったらだめだよ。」

といたいとおもいました。わらわれて、タニシヤは、きつとかなしいきもちになったとおもいます。

ほかのともだちは、なぐさめてあげるとか、ふくをふいてあげるといっていました。いろいろな

「やさしさ」があるんだなとおもいました。

わたしのまわりに、どんな「やさしさ」があるか、かんがえてみました。

わたしが、やすみじかにそとであそんでいて、こけたことがあります。いたくてないていると、いっしょにあそんでいたともだちが、

「だいじょうぶ。」

といって、ほけんしつにつれていってくれました。とてもあんしんしたきもちになりました。なので、わたしもともだちがいないとき、

「どうしたの。」

とこえをかけることができました。

これからも、ともだちがこまっているときは、やさしくしたいです。



# ともだち

ぼくは、ともだちをつくることが、大好きです。ぼくの小学校は、たくさんの子どもがかよって、大いたけんで一ばんです。一年生は、七クラスあって、小学校に入学して、たくさんのもだちができました。

ともだちには、ひとりひとりちがったとくちゅうがあります。おしゃべりが大すきな子。えをかくのがじょうずな子。はしるのがとてもはやい子。きょうしつの中には、いろんなともだちがいて、学校にいくのがたのしいです。

休みじかんになると、うんどうじょうや中にわい出て、たくさんのもだちと、おにぎっぴやドッ

ジボールなどをしてあそんでいます。あつい日も、すこしくらいのおめの日でも、そとに出ています。

ところが、なつ休みがおわってすぐに、ぼくは、ともだちにいやなことをしてしまいました。ちょっとからかおうとおもって、ともだちのくつをとって、にげてしまったのです。そのことをまわりにいたともだちが、先生にいつて、ぼくは、先生からよばれました。

先生は、ぼくに、

「おともだちにいやなことをすると、みんながはなれていってしまうよ。」

といました。

ぼくは、先生のはなしをききながら、ともだちひとりひとりのかおをおもいうかべました。みんなにこにこしているかおしか、おもいうかびません。むねのおくのほうが、ギュツとなりました。ひとりぼっちになるのは、ぜったいいやです。ぼくはじぶんからあやまろうときめました。

「ごめんね。」

「いいよ。」

このことばで、ぼくはすっかりしました。「またいっしょにあそべるかな。」とすこししんぱいだったけど、つぎの日、

「おにぎっつ、するひと。」

と、大きなこえがきこえて、ぼくは、なかまに入りました。やっぱり、みんなといっしょにあそぶのは、とてもたのしいです。

これから、ぼくのこころの中にあるいじわるをしたくなる気もちが、また出てくるかもしれないけど、できるだけ、ともだちとなかよくすごしていきたいです。それに、こまっているともだちがいたら、たすけてあげようとおもいます。

たくさんの子どもがかよっている学校にいるので、これからも、いろいろなとくちょうをもっているともだちをたくさんつくっていきたいです。

# じぶんらしく生きること

八がつ六にちにへいわについておべんきょうしました。せんせいがじゅぎょうのさいごに、

「へいわとはどういうことだとおもいますか。」

とききました。わたしは、

「みんながびょうどうなこと。」

とはっぴょうしました。へいわとはみんながしあわせなこと、そのためにはみんながびょうどうであることがだいじだとおもうからです。

わたしはびょうどうについてかんがえていたことがあります。たとえば、男だからあお、女だからあかというをきめるのはびょうどうではないとおもいます。おかしいなあとおもいます。それ

と、男はズボン、女はスカートというのもおかしいです。女のこだってあおをえらんでもいいし、ズボンだってはいてもいいはずです。じぶんがえらびたいものをじゆうにえらべることがだいじだとおもいます。

—ねんせいになるまえにランドセルをかうとき、わたしはあおがいいなとおもったけど、いもうとが、

「おねえちゃんは女だからピンクでしょ。ピンクじゃなきゃだめ。」

といっておこって、わたしといいあいになったことがありました。わたしはゆずりたくなかったけ

どあまりにもうとがうるさくいうので、さいごはあきらめてピンクのランドセルにしました。なんだかもややしたきもちになりました。いもうとはほかにもけんかやいいあいになることがあります。でも、おかあさんはわたしにだけ

「ごら。○○やめなさい。」

とおこってきます。いもうとがさきにかみのけをひっぱってきてもおこられるのはわたしだけ・・・ということがよくあります。なんだかびょうどうじゃないなとおもいます。

わたしがこんなことをかんがえるようになったのは、「ちきゅうはほうちしてもそだたない」というテレビばんぐみをみたからです。そのテレビでは、ジェンダーびょうどうということばがでてきました。男だから女だからではなく、じぶんらしくいえることがたいせつとっていました。わ

たしはなるほどなあ、いいことばだなあとおもいました。

がっこうやいえでも、ほんとうはいいたいことがあってもがまんしてしまうことがあります。でも、がまんばかりしてもあいてにきもちがわかってもらえないので、じぶんらしくいえるため、びょうどうになるためにも、おもっていることをいうことがだいじだとおもいました。まず、じぶんがじぶんをたいせつにすること、そして、みんなもじぶんをたいせつにすること、それができたら、しあわせでへいわなせかいになるとおもいます。

# 友だちとなかよくするために

わたしは、小学生になってたくさんの友だちができました。まい日友だちが、

「○○ちゃんおはよう。」

と、言ってくれます。わたしは、あいさつをしてくれるとうれしくて、今日一日がんばれそうな気持ちになります。

あいさつのように、友だちとなかよくなるために大せつだと思うことが三つあります。

一つ目は、おもいやりです。クラスの友だちがころんで、うでをこっせつしてくることはありません。するとクラスのみんなは、

「だいじょうぶ？ なにかあったら言ってね。」

と声をかけ、プリントをノートにはったり、きゅう食をはこんであげたりしていました。わたしはクラスみんながやさしくて、いいクラスだなともいました。わたしにもつをはこぶのをてつだったり、どうぐのかたづけをてつだったりしました。やさしい人を見ると、やさしい気もちになるのだとおもいます。

二つ目は、きょう力です。きょう力をするといろんなことが早くおわったり、たのしくがんばることができます。

わたしは一年生のときにうんどう会で、リレーのせん手になりました。さいしょは、ドキドキし



てきんちょうしたけどチームできょう力してバト  
ンをつないでいくともっとがんばろうと思えまし  
た。また、なかのよい友だちや見てくれている人  
が、

「がんばれー。」

「ファイトー。」

などと、おうえんしてくれたのがうれしくて、さ  
らにがんばることができました。

一人ではできないことも、みんなできょう力し  
たらできるとわたしは思いました。

三つ目は、言ばづかいです。どうしてこれが大  
せつかというと、同じ言ばでもつよい言い方だ  
と、人がいやな気もちになったりするし、はんた  
いに、やさしい言い方だとゆるしてくれる気もち  
になったりするからです。

わたしがともだちや先生と話すときに気をつけ

ていることは、先生は友だちではないので、

「なにかてつだおうか。」

ではなく、

「なにかてつだいましょうか。」

と、ていねいに話すようにしています。友だちに  
は、じぶんがいやなことをしたと思ったらずぐ  
に、

「ごめんね。」

と、あやまるようにしています。

みんなが言ばづかに気をつけることで、いや  
な気もちになる人がへって、ともだちとなかよく  
できると思います。

# 友だちを大切にしたい

この前、先生が読んでくれた本は、ある女の子がてん入生の男の子をいじめっ子からたすけるというお話でした。その女の子は、せがひくくて、まわりの人からよく「おチビちゃん」と言われるのですが、それをすごくいやがっていて、言われるたびに、いつも、

「わたしは、おチビちゃんじゃない。」

と、すごく大きな声で言いかえます。そこがおもしろくて、いやなことはいやだと言えることがかっこいいなと思いました。

わたしは、じぶんもこの女の子みたいに、友だちを大切にしたいなと思いました。そして、一学

きのことを思い出しました。

ある日のできごとです。ちかくのせきにすわっている友だちが、ほかの子からせめられて、目をまっかにしてないいました。わたしは、かわいそうだと思って、あい手の子にちゅういしたのですが、わかってもらえませんでした。その子には、その子のりゆうがあってゆずれないというかんじでした。わたしは、こまってしまいました。でも、りゆうがあつたとしても、友だちがこんなにないているんだから、あやまってほしいと思いました。とうとう、わたしは、このことを先生にそうだんして、かいけつしてもらいました。

そのとき、なっている子とあい手の子が、おたがいにあい手の気もちを考えることができたからかなおりできたんだと思います。

わたしも、ときどきちょうしにのって、友だちにいやなことをしてしまうことがあります。でも、いつも友だちを大切にしたいと思っているのも本当です。だから、そのためには、どうしたらいいのかと考えてみました。

まず、友だちとなかよくあそびたいです。だけれど、

「あそびに入れて。」

と言ったら、

「いいよ。」

と言っていていっしょにあそびたいです。もし、一人でさびしそうな人がいたら、

「いっしょにあそぼう。」

と、じぶんから声をかけられるようにしたいです。

つぎに、いじわるをされている人がいたら、だまって見ていないで、すぐにとめたりたすけたりしたいです。もちろん、わたしが人をいじめたり、いやなことを言ったりはしないようにします。

ほかにもいろいろ考えたのですが、とにかくあの本に出てきた女の子のように、じぶんにじしんをもつて、友だちを大切にできる人になりたいです。そうしたら、わたしもしあわせでうれしいし、まわりの友だちもえがおですごせると思えます。じぶんにできることは、だまっていないでどんどんやっていこうと思います。

# なんでもおたすけたい

わたしは、はじめてさべつについて知りました。

男と女、はだの色が黒か白、がいこく人と日本人、  
せがひくいとかせが高いとか、人とはちがうとい  
うだけできずつけてしまうことがわかりました。

わたしは、ようち園のとき、自分の考えばかり  
わかってもらいたい気もちがつよくて、よくけん  
かになっていました。そのときは、どうしてわ  
かってくれないの？と自分の気もちばかりをつた  
えることしかできませんでした。お友だちとけん  
かしたり、おとうととけんかしたりすると、お母  
さんがいつもこんなふうに言っていました。

「みんなちがってみんないい。みんなにも自分

の考えや思いがあるから、どうしたの？とあい  
ての気もちを聞くことが大切だよ。」

と言っていました。でも、わたしは、なかなかう  
まくできませんでした。

小学生になって、新しい先生、お友だちができ  
て、まい日とてもたのしいです。

小学校では、同じクラスのお友だちだけじゃな  
く、いろんな学年の人とも仲よくなれて、休み時  
間では、自分から「お友だちになって。」と声を  
かけて「いいよ。」と言ってもらえることがうれ  
しくて、どんどんお友だちがふえました。

まわりの人たちを見ていると、こまっている人

が、いることにも気がつくようになりました。

「どうしたの？」と声をかけると、「自分のくつばこがわからない。」という人がいたので、いっしょにさがしたことがありました。

このことを家にかえてお母さんに話したらとてもよろこんで、おじいちゃんやおばあちゃんにもうれしそうに話してくれました。わたしはこのとき、こまっている人をたすけることができたんだ、これからもこまっている人がいたらどんどん声をかけようと思いました。そんな気もちでいると、ようち園のときのようなけんかになることが少なくなってきた気がします。

わたしもこまっている時にだれかにたすけてもらえたら、とてもうれしいです。

いつでも、人とおちがうところを見つけるのではなく、みんながたすけあう気もちでいっぱいにな

れたらいいんじゃないかなと思いました。

二年生になってからは、お友だちと「なんでもおたすけたい」というグループをつくりました。わたしはさんすうが大好きなので、けいさんでこまっている人がいたら「どうしたの。」と声をかけたりしています。いっしょにできたら、お友だちがうれしそうに「ありがとう。」と言ってくれて、わたしもうれしい気もちでいっぱいになります。なんでもおたすけたい、がんばるぞ!!



# みんなちがってみんないい

「なんで○○ちゃんの声ってガラガラなの。」

わたしが二年生のころ、体育のじゅぎょう前に集まっていた時、わたしの後ろの方で男の子たちが、私の声のことであわさ話をしていたそうです。わたしはみんなの中にいてその話には気づきませんでしたが、近くにいた三つ年上の兄が気づき、すぐにかけてくれました。そしてあわさ話をしていた男の子たちに、

「小さい時に病気をして、のどのところを手じゅつしたから仕方がないんだよ。」

とせつ明してくれたそうです。

わたしは赤ちゃんの時に大きな病気をして、命

がきけんなじょうたいになったそうです。

「手じゅつをすれば命は助かるけど、そのかわりに声が出なくなるかもしれません。」

とお医者さんに言われて、おうちの人はすごく心配をしたけど、やっぱり命が一番だから、手じゅつをすることを決心したそうです。わたしはその時のことをおぼえていないけど、家族のみんなに大切に思われていたんだなあと感じやしています。だから、兄がわたしの声のことをかばってわたしをまもってくれたことをうれしく思いました。

声のことは気にしてもしかたがないことだから

ら、わたしは気にしないで心に決めています。だからもし声のことでだれかに何か言われたとしても、自分できちんとせつ明しようと思います。

でも、みんながおたがいのことを思いやって、いやなことやきずつくことを言わないようにしたら、いじめなどのない平和な学校になるんじゃないかとねがっています。だから、わたしは友だちにいやなことを言ったり、うわさをしたりしたくないし、みんなも同じ気持ちでいてくれたらいいなと思っています。

三年生になり、わたしの声のことをうわさする人はいません。わたしも気にせず発表したり歌ったりして勉強しています。

さいきん国語で、金子みすずさんの「わたしと小鳥とすず」という詩を習いました。人間にも鳥にもすずにもそれぞれいいところやとくいなこ

とがあるという詩です。

わたしは、リコーダーがとくいです。お手伝いもよくします。わたしと仲のよい友だちは、明るくてやさしいです。

人それぞれ、とくいなことやいいところ、苦手なことなどがあります。「みんなちがってみんないい」そう思って、これからも楽しい学校生活を送りたいです。



# おばちゃん

ぼくには、おばちゃんがいます。おばちゃんは、ぼくのひいおじいちゃんの妹です。だからぼくにとっては、本当は大おばさんです。

ぼくとおばちゃんは、たん生日が同じです。ぼくが生まれた時、おばちゃんは大いそぎで歩いて会いにきてくれました。それほど元気だったおばちゃんも、今では九十四才。ろう人かいごしせつでくらしています。

ぼくは、月に二回ぐらいおばちゃんの所に会いに行きます。ぼくたちが会いに行くと、おばちゃんはいえ顔になります。そして、

「よう来たなあ。」

と言います。

ぼくたちは、おばちゃんの所に行く時は、いつもあまい物を持って行きます。おばちゃんは、あまい物が好きだからです。とくにシュークリームが好きです。ぼくと弟も、おばちゃんの所でいっしょに食べるのを楽しみにしています。

おばちゃんは、食べている時が一番楽しそうです。うれしそうにペロリと食べてしまいます。おばちゃんがペロリと食べてしまうと、ぼくは、うれしくなります。食よくがあると元気だというしょうごだからです。

食べてしまうと、弟はすぐに、



「帰ろうよう。」

と言い出します。ぼくは、それを聞いて、おばちゃんにわるい気がします。でも、ちょっとだけ弟にさんせいする気持ちもあります。どうしてかという、おばちゃんと話しても何を言ってるのかあまりわからないからです。おばちゃんと話すときつかれます。でも、それが年をとるということなんだと思います。ぼくたちも、いずれそうなくていくのです。だからぼくは、おばちゃんとたくさん話がしたいです。

おばちゃんの所から帰る時には、いつも弟と二人でおばちゃんの手をにぎって、元気パワーをちゅう入します。おばちゃんの手は、しわしわでほねばっています。強くにぎると、すぐにおれてしまいそうで少しこわいです。

だから、やさしくにぎって、

「元気パワーちゅう入!!」

と言います。

すると、おばちゃんは、

「またきよえ。」

と半分え顔で言います。でも、もう半分は、ぼくたちに帰ってほしくないという悲しそうな表じょうが見えます。それを見ると、ぼくは、まだいたいという気持ちが大きくなります。だから帰る時はいつもさびしくなります。

でも、ぼくたちが来た時のおばちゃんのようにぶ顔を見ると、ぼくもうれしくなるからやっぱりまた来ようと思います。

# わたしは、左きき

わたしは、小さいころから、はしをもつ時も、

えんぴつをもつ時もずっと左きき。わたし自身は、

左ききを気にすることはなかったけど、友だちか

ら「左ききなよ。」「左むずかしそう。」と言われ

たことがあった。わたしは、家ぞくの中でも一人

だけ左きき。左ききってみんなから見てむずかし

そうって思われているんだと思った。左ききと右

ききってきき手がちがうだけでやっていることは

全部同じ。でも、なんで左ききってふしぎそうに

思われるんだろうと思った。右ききの人の方が多

いからかな。

わたしは、電車の中で、白いつえを持った目が

不自由な人を見かけた。そのとき、大へんそうだ

なと思った。電車をちゃんとおられるのかな。

つまずかずに道を歩けるのかな。つまずいたらだ

れかが助けに来るのかな。同じ人間なのに、わた

しが左ききでみんながふしぎそうに思うのと同じ

事を考えてしまうことが気になった。その時、わ

たしは、「はっ。」と気がついた。見た目だけでど

んな人間かを決めつけたらだめだということをも。

右きき、左きき、目が不自由、手が不自由、足が不自由、はだの色がちがう、かみの色がちがう、目の色がちがうそれをもって生まれた人はそれが当たり前だと思っている。だから自分が思う当たり前とちがう人にあつたら、自分とはちがうから、なんだか大へんそうと思ってしまう。でも、自分とまわりの人たちは、生きている人生もちがう、生まれた場所もちがう、だから、みんなといっしょじゃなくていいとわたしは思った。これからわたしは、左ききで生きていくだろうと思っている。となりの人とひじがあたったり、ドアノブが反対回ってたたり、ときどきふべんな事はある。だからそんな時は、ゆずり合ってく

れたらうれしいな。わたしがこまっている時に助けてもらったうれしい気持ちを他の人にもやってあげたい。その気持ちがみんなの心の中にあつたら世の中はどうなるのかな。わたしはチームプレイが生まれて、おたがいの事を考えられる世の中になると思う。わたしはそれを信じて、まずは自分が行動できる人になりチームプレイを作っている人になりたい。



# 障がい者ってかわいそうなの？

私は、学校の授業で視覚障がいのある方と聴覚障がいのある方にお会いして、障がいのある方はどのような気持ちで生活しているのか気になりました。見ていると不便で大変そうな印象をもち、障がいのある方は自分たちとはちがう特別な存在だと思っていました。「特別」と相手に対して思うことは、果たして「良いことなのか」、「悪いことなのか」疑問に思っていたときに、たまたま図書館で『わたしが障害者じゃなくなる日』という本を見つけました。

この本を書いた海老原宏美さんは、体の筋肉がだんだんおとろえてくる重度の障がいのある方でした。筋肉がおとろえてくる病気なので、みんなが当たり前のようにしているかけっこも、ボール投げも、リコーダーを吹くことも呼吸をすることでさえもできなくなる病気です。

呼吸ができなくなるので、人工呼吸器というバッテリーで動く機械で呼吸をされていて、出かける時はいつもコンセントを探す生活をしているそうです。

実際、二〇一一年の東日本大震災のときは長時間の停電になったため、人工呼吸器のバッテリーが切れて亡くなった人がいると知って、とても怖くなりました。機械が動かなくなるかもしれない不安いつも生活している気持ちは、私のおばあちゃんも人工呼吸器を使っていたのでなんとなく想像できました。

私は、障がいとは体が弱いこと、どこかが使えないことだと思っていました。ですが、この本で障がいとは体が弱いことだけではなく、お腹の大きな妊婦さんやベビーカーを押しているお母さん、杖をついているお年寄り、よちよち歩きの小さな子ども、日本に来たばかりで言葉の通じない外国の方のことなども障がいがあることと同じと言っていました。

この人達に共通するのは、何かする時に困ったり、不便だったりすることです。社会の中で生活していて、これは使いにくいなとかやりにくいなと思うことがあったら、それは全部障がいと書いていました。そう考えると、誰もが障がい者と考えて

きました。私の身近にもたくさんいそうだし、これから私も障がい者になることもあるだろうと思いました。

本の中で気になっていた言葉がありました。「障害者ってかわいそうなの？」という一文です。作者の海老原さんは、障がい者はかわいそうだから助けてあげようという思いやりは健康者から思えば良いことをしたと感じるけど、障がい者から思えば上から目線に感じることもあると書いていました。私がもし障がいのある立場で、いつも手伝ってくれる人に「かわいそうだから、手伝ってあげる」と言われたら心がモヤモヤしてしまうと思います。何か平等になれない気がして寂しい気持ちになるかもしれません。

車いすの人や目が不自由な人が、どうすれば一緒に参加できるか考えることを「合理的配慮」というそうです。勝手に「あなたのために思って配慮しました」というやり方ではなく、本人と相談して決めることが大切と書いてありました。小さい子といっしょに遊ぶ時に、その子のためにルールを考えることも合理的配慮に入るそうです。難しいことかと思ったけど、私も弟と遊ぶ時にはよくしていることかもしれません。

「平等」というのもみんなに同じだけ分けるのではなく、その人が必要とする分を分けることが大切で、一人ひとりの望むことをしっかり聞かなければならないと書いてありました。と

ても大変なことだけど、考えることをやめないことが大事なんだと知りました。

障がいのある人もない人も、目指すのは思いやりではなく「人権」と書いてありました。人権とは、全ての人が生まれながらに持っている、人が人らしく生きていくための権利です。

車いすの人を助けるために必要な気持ちは「かわいそうだから」ではなく、健康者と同じように生活する権利があるからで、感情や思いで左右されてはいけないものが人権です。

この本を読んで学んだことは、見た目では分からなくても障がいのある方がいるかもしれないし、気づかないだけで周りにたくさんの方が障がいに困っているかもしれないということです。そして、そういう時に私ができる行動はどういったことがあるだろうと考えました。どのような障がいのある方がいて、何に困っているのか、どうすれば一緒に楽しめるのかなど、もっと知りたいです。

私がこの本を読む前に疑問に思っていた障がいのある方を「特別」だと思う事は、差別をしていることと同じなのかもしれないと思えてきました。

障がいのある・なしに関係なく、周りの人に気遣いや合理的配慮ができるようになりたいです。

# 自分らしく

「女子なのに野球してるの。」

同級生から言われて私は

「どうしてだめなの。」

と思いました。

私は二年生のころから野球チームに入りました。お兄ちゃんが入っていたからです。入る時はとまどいでしたが、チームのみんなは優しくむかえてくれて安心しました。

野球部に入りたてのころは、女子だけ別で練習するように言われて悲しい思いをすることもありました。でも練習しているうちに、できなかったことができるようになり、楽しくなってきました。「女子」とまとめてよばれていたのが、かんとくに「○○」と自分の名前ではばれて試合に出させてもらった時はうれし

かったです。

大会で他のチームを見てみると、女子がキャプテンのチームが優勝していました。私はそれを見て、カッコいいなと思いました。その時、男女関係なく野球をしていると実感し、もっとやる気が出ました。

しかし、三年生の時、わすれられない出来事が起こりました。学校で部員ぼしゅうの紙を配ってもらった時、クラスの何人かが写真に私がうつっているのに気づいて、

「女子なのに野球してるの。」

「野球って男子がすることじゃないの。」  
などと言いました。私は心の中で「だめなの。」「なんで男子がするって決めつけるの。」と思いました。が、何も言えませんでした。

それから、野球の練習着の時には学校の友だちに会うことをさけていました。

四年生になり、道德の授業で「レッドー赤くて青いクレヨンの話」の学習をしました。レッドは、赤いラベルがついているけど本当は青いクレヨンです。お話の中でまわりのクレヨン達は、赤いラベルなのに青いことをおかしいと思っていました。でもパープルだけは、見た目のラベルだけで赤と決めつけずにレッドの本当の色に気付き、かがやかせてくれました。私はパープルのように見た目だけで決めつけずに、その人の良さをみとめられる人がふえるといいなと思いました。

その後、u&iという番組の「男らしく、女らしくがいいの」というお話を見ました。そのお話には、さいほうや人形遊びが好きな男の子の「あい」、野球が好きな女の子の「ゆう」が出てきます。あいはみんなに自分の好きなことをないしょにしていました。ゆうは、野球がしたかったけど、仲間に入れてもらえませんでした。二人とも、世の中に男らしく女らしくの考

え方があることによって、好きなことをどうと楽しむことができませんでした。でも、ゆうとあいは、世界には自分らしさをつらぬいている人がたくさんいることを知り、だれでも自分らしく生きていいことに気付きました。

私がこの番組で心にのこっているのは、「女だから、男だから、○○だからと、やりたいことをがまんしたり、がまんさせたりすることは、その人のかのうせいをうばってしまう。」という言葉です。この言葉を聞いて、今度「女子なのに」と言われたら、

「男でも女でもしていいんだよ。」

と言えるようになりたいと思いました。女子が野球をしていることがめずらしく思われないようになればいいと感じました。この授業を通して、自分らしく生きていいんだと自信が持てました。

これからは、世の中にある「女子だから」「男子だから」という考え方をへらしていきたいです。そして、だれもが自分らしく、自信を持って生きていけるようになってほしいです。

# きずつく言葉からぼくが考えたこと

「お前ぶちのめすぞ。」

二年生のころ友達からぼくが言われた言葉です。とつぜん言われてびっくりしました。そして、だんだん悲しくなりました。原いんは、ぼくが宿題をしていて遊ぶやくそくの時間におくれたからです。

「おくれてごめん。」

と、あやまったのにそんな言葉を言われて本当に悲しかったし、なんでそんな事を言うんだろうと思っていた。ぼくがおくれたのも悪いけどそんな言い方するなんてひどいと思いました。

それを見ていた他の友達が次の日に、

「昨日大じょうぶだった。」

と、心配してくれました。いやなことを言われたときも泣きそうだったけど、心配してやさしい言葉をかけ

てもらったときも、うれしくて泣きそうでした。

「やった方はおぼえていないけど、やられた方はいつまでもおぼえてるんだよ。」

「イライラして思わず出た言葉だったかもしれないけど、それは言葉のぼう力だね。」

と、お姉ちゃんが言っていました。

それを聞いて、たしかにそうだなと思いました。そのときにいやなことを言った友達はこのことを忘れているかもしれないけど、ぼくは今も、そのときのことをよくおぼえているからです。

お母さんは、

「その子は何かいやなことが続いてイライラしてたのかな。でも、たとえそうだったとしても、そんな言い方をしたらよくないね。」



と、言っていました。

でも、その子はいつもいやなことばかり言っているわけではありません。良いところもたくさんあります。だから、今ではその子とは仲が良く、よくいっしょに遊びます。それに、言葉のぼう力はそれが最後でした。でも、もしもいやなことをずっと言われ続けていたら、それはいじめにつながっていたかもしれません。相手がきずつく言葉を言っても、けっ局はおたがいがいやな気持ちになるし、何もかい決しません。だから、ぼくはおこっていても、なるべく相手のことを考えて気持ちを伝えたいと思います。

こうして、ぼくのことはいじめにつながらなかったけれど、いじめと聞くといやな気持ちになります。いやなことはだれにもしてはいけないと思います。でも、いじめている人も、初めはいじめるつもりはなかったのかもしれませんが。まずは言葉にする前、行動する前にそのことがよいことなのか、よく考えることが大事だと思います。こうして少しでも気を付けることで、いじめをふせぐことができればよいです。

また、ぼくは、なやみがある時は、友達や先生、家族に相談するとよいと思います。でも、気軽に相談できない人もいると聞きました。そんな人達が、相談をしやすいかんきょうになるとよいです。そして、みんなでなかよくして、ずっと笑顔でいたいのです。そこでぼくは、ぼくなりには何か行動しようと思いました。ぼくは人前でしゃべることはあまり得意ではないから、休み時間になるべく多くの友達と遊んで、もっと仲良くなり、気持ちを言い合える関係にできたらと思いました。遊んでいると、小さなトラブルはあったりしますが、すぐにおたがいの気持ちを伝え合って、大きなケンカにならずにすんでいます。これから気持ち言い合い、わかり合える関係が、一人でも多くの友達とぎずけたらいいと思います。

ぼくの学校は一学年一クラスです。中学校まで今のクラスの人々と毎年一緒に過ごします。なのでいじめのない楽しいクラスや学校にしていきたいです。ぼくが悲しくなった言葉をもう聞かないために、まずぼくが相手が悲しくなる言葉を言わないと決めています。

# 身近な思いやり

ぼくの小学校には、「ひまわりの約束」があります。「ひ」は、ひとりぼっちをつくらない。「ま」は、まわりの人のいいところをみつける。「わ」は、わるくちをいわない。「り」は、りかいしあおう。これで「ひまわり」です。学校では、みんなもぼくもこの約束を大切にして過ごしています。ぼくは、この夏休みの中で「ひまわり」の大切さについて知る出来事がありました。

ぼくは今年の夏休みに、お父さん、お母さんとお姉ちゃんと一緒に、千葉のおじいちゃん、おばあちゃんと宮城のおばあちゃんの家に帰省しました。一年ぶりに会え、とても喜んでくれ、ぼくもとてもうれしかったです。だけど、一つ困ったことがあります。

それは、宮城のおばあちゃんとの会話です。宮城のおばあちゃんは、耳が遠く、そのためぼくが言ったことが聞こえないことがあります。また、脳の病気をしているので、スムーズに理解ができず、うまくコミュニケーションがとれないことがあ

ります。話しかけてもなかなか気づいてもらえなかったり、会話をしている時に話がかみ合わなかったり、質問をしても的外れな返事が返ってくるがありました。ところが、お姉ちゃんは普通におばあちゃんと会話ができていることに気がきました。そこで、ぼくはお姉ちゃんに、

「どうしてお姉ちゃんは、ばあばと普通に話ができるの。」と、聞いてみました。するとお姉ちゃんは、

「まず、ゆっくりばあばの名前をよんで、気付いてもらってから、分かりやすい言い方で、ゆっくり、大きな声で話すようにしているんだよ。それから、ばあばの話がそれたり、的外れな答えが返ってきたり、すぐに否定しないように気を付けたらいいんだよ。」

と、教えてくれました。ぼくも、お姉ちゃんに教えてもらったことに気を付けて、おばあちゃんと話してみると、なぜか、普通に楽しく会話をすることができました。おばあちゃんも喜ん

で、たくさん自分から話してくれました。

それから、おばあちゃんは脳の病気をしているので、体を上手く動かすことができなくなっています。移動する時は、家中でも外でも常に手押し車やつえを使って、ゆっくりゆっくり歩きます。転んでしまうと体が思うように動かないので、自分で立ち上がるのも大変なので、転ばないように注意していると教えてくれました。なのでぼくは、おばあちゃんが移動しようとしている時は、近くに手押し車やつえを持って行ってあげました。ぼくにとってはちょっとしたことだけど、おばあちゃん

は、  
「ありがとう。助かるよ。」

と、とても喜んでくれました。おばあちゃんに「ありがとう」と言ってもらい、ぼくはとてもうれしくて、もっとおばあちゃんのために何かをしてあげようという気持ちに自然となりました。

そこでぼくは、近くに住んでいて、いつもおばあちゃんのお世話をしてくれているおばちゃんにもいつもどのようなようにおばあちゃんと接しているのかを聞いてみました。おばあちゃんは、  
「できるだけ本人の希望通りにしてあげるようにしているかな。でもそれがむずかしい時は、否定せず、全部は無理でも

半分くらいは希望通りになるようにしてあげているよ。」  
と、教えてくれました。

ぼくはこのおばあちゃんとの経験を通して、「相手のことを理解する」ということについて考えてみました。それは、相手の状況や状態、気持ちによりそい、自分の中で勝手にこうだと決めつけず、思いやりの気持ちを持って接したり、話したりすること。それが「相手のことを理解する」ということではないかと思いました。

普段の生活の中で、ぼくにとってはちょっとした何気ないことでも、他の誰かにとっては大変なことがあるように、その逆のこともあると思います。一人一人がほんの少しでも身近な誰かのことを考えて話したり、行動したりする。こんな身近な思いやりでいっぱいになったら、おたがいを理解することにもつながって、みんなが楽しく過ごせるのではないかと思いました。

ぼくは改めて、学校の「ひまわりの約束」の大切さを学びました。

ぼくは、みんなが楽しく、気持ち良く過ごせるように、学校だけではなく、普段の生活の中でも、今まで以上に「ひまわり」を大切に過ごしたいと思います。

# 人権について

私は五年の見学遠足で、人権について学ぶ機会があり、人権についてより深く考えるために人権作文を書こうと思いました。

そもそも人権とはすべての人間が幸せに生きる、生まれながらに持っている権利です。人権問題とは、人間が平等に生きることを妨げる問題のことを指し、現代の日本および世界ではさまざまな人権問題があります。

そして、私たちの身のまわりにも、区別に終わらず差別にながることがたくさんあります。実際に、生まれ、性別、年齢など「本人に責任のないこと」「努力で変えられないこと」で差別を受け、苦しんでいる人がいます。つまり、「それはその人の責任なのだろうか?」「それはその人の努力で変えられるのだろうか?」と一人ひとりが日頃の言動を見つめ直すことで、「自分が傷つけられている」あるいは「人を傷つけている」ことに気づきやすくなり、自分やまわりの人の人権を守ることにもつながります。

人権問題の中でも、「いじめ」は大きな問題とされ、学校に通う私にとっても身近な問題です。

私がいじめをなくすために大切だと思うことは、まず一人ひとりが「自分がされていていやなことは人にはしない」ということを常に考えて行動することだと思います。私たちは、「こんなことをされたいやだろう」「もしこう言われたら傷つくだろう」と相手の立場に立って気持ちを想像する力を持っています。その想像力を働かせていくことが大切です。

次に、私が考えたのは、「思いこみ」や「決めつけ」によって生じる人権問題についてです。あなたは、「高齢者は、目が悪くて耳が聞こえづらい」というような思い込みを持ってはいないでしょうか。高齢者といってひとくくりにしたり、年齢によって決めつけたりするのではなく、その人自身をみつめることが大切です。すべての人が社会を構成する一員として、生き生きと活動できる社会づくりが必要とされています。

また、国籍による人権問題についても考えてみました。わたしは今、日本人として日本に住んでいます。そして、日本に観光に来た日本人ではない人のことを「外国人」とよんでいる場面をよく耳にします。しかし、私たちも外国に行けば、「外国人」となります。言葉が通じずに困ったり、文化のちがいなどにとまどったりすることがあるのではないでしょうか。そのように困った時、自分がどのように接してもらえると嬉しいか、どのような扱いを受けたら嫌な気持ちになるのかを考えれば、外国から観光に来た人たちとの接し方が見えてくるはずです。現在、国際化が進み、私の住んでいる大分市にも、約四千二百人の外国籍の人々が暮らしているそうです。私の学校には、A・L・Tとして外国人の先生が外国語の授業をしに来ていますが、こんなにも多く、外国からきた人が、自分の住んでいる市にいるのかとおどろきました。このような状況の中でも、「就職・職場で不利な扱いを受ける」「アパートなどへ入居することが難しい」など、外国からきた人々が地域で受け入れてもらえない状況があります。さまざまな問題が起こっている要因として、わたしはコミュニケーションが十分にとれないことや、考え方や文化のちがいがあまり理解されていないことがあると考えています。

年齢や国籍に関する人権問題や差別をなくすためには、さまざまな機会をとらえて交流し、「高齢者は〇〇だ」という思い込みや、外国籍の人への差別をなくすことが必要です。考え方や文化のちがいをこえて、共に生き、人権が尊重される社会へとつなげていくことが大切だと考えます。

私は、五年の見学遠足で、障がい者の人たちがどのような生活をしているのかを体験し、人権について深く考えるようになりました。この人権作文を書くにあたって、さらに詳しく調べること、自分や周りの友だちの人権を守るために、すべきことがだんだんと分かってきました。

これからの学校生活の中でも、人権を考える機会は本当によくさんあると思います。一つひとつの場面の中で、この学びを活かして行動していきたいです。

# 大切なこと

私は四年生のころ、教科書に違和感がありました。

なぜかというと、「障害者」の害がひらがなで書かれていたからです。その時私は、なぜひらがなで書かれているのか、分かりませんでした。

先生は、黒板にも害だけひらがなで書いていました。すると先生は、

「障害者の害は、あまり良くない漢字だからひらがなで書くんだよ。」

と教えてくれました。

学校で、夏休みの宿題に人けん作文が出ました。先生が教えてくれた事を一度調べてみたかったので、この事を書きました。

まずは、「障害者」の漢字の意味を調べました。障はじゃまになるという意味だそうです。障がい者の方

には、自分の障がいじゃまになることもあるかもしれないけど、逆に考えると、周りの人が障がい者の方をじゃまに思っているとも考えられると思います。害は悪い状態のことと書いていました。たしかに先生が言った通り、障がい者の方は害ではないから、ひらがなで書いた方が良いなと思いました。なので、私は障も害もひらがなにし、「しょうがい者」と書くのも良いと思いました。

次に、だれが害をひらがなに変えたのか調べました。私は、国が害をひらがなに变えていると思っていました。調べてみると、いくつかの自治体で「障がい」と書くようになり、今では、二十府県が害をひらがなで書いているそうです。一人一人がひらがなで書いて今、こんなに広がっているのかとおどろきました。で

も逆に「障害者」と全て漢字で書いてほしい方もいるそうです。その理由は、障害を持って生きていく「社会」に不便なことがあるので、社会に障害があることを伝えたいからだそうです。

この理由を見て、不便なことがある社会から、障がい者の方がくらしやすいように、変わっていくと良いなと思いました。

さらに、障がい者の方の仕事について調べました。障がい者の方は、日本に約九百三十六万人いるそうです。そのうち、約六十四万人の方が仕事につけているそうです。

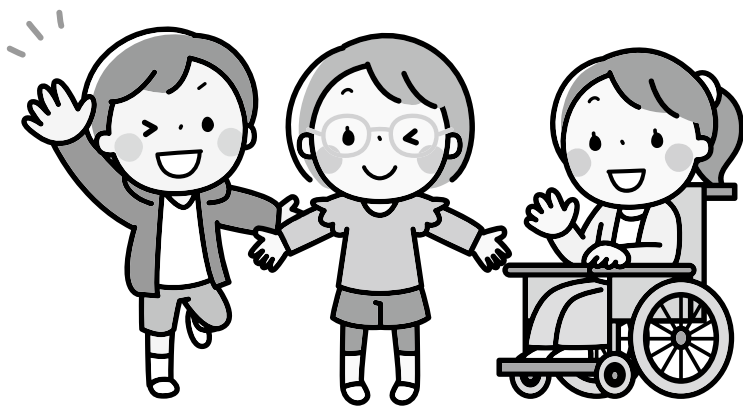
最近、道德の授業で、チョーク工場で働いている方を見ました。こんな工場がふえたら障がい者の方もくらしやすいのかなと思いました。

「障害者」でも、「障がい者」でも、字から変えるのではなく、学ぶことや気持ちを考えることから始めると良いのかなと思います。

そして、障がい者の方が安心して毎日楽しくくらすよう、周りの人の助け合いや、一人一人が障がい

について知るなど、小さな事から変えたいです。授業でも障がいについて学ぶことがあります。その機会を大事にし、これから、しっかり考えていきたいです。

今回、障がい者の方について、色々知れたと思います。おどろいた事が沢山ありました。四年生のころに、先生が教えてくれた事がくわしく知れました。みんなにも広く知ってほしいです。





# 友だちと仲良くするために

「友だちやめる。」

これは以前、友だちから言われた言葉です。そのとき、私は意味がわからず、悲しみと怒りがまざったような不思議な気持ちになりました。

きっかけはささいなことでした。そうじ中に私の使っていたそうじ道具を友だちが持っていてしまったのです。それに対して、私が「返して！」と言ったことが相手にとっては気に入らなかったのかもしれませんが、とはいえ、そうじ道具をとられたうえに、「友だちやめる」と言われた私は、納得がいきませんでした。そして、お互い話をしないまま、そうじ時間が終わってしまいま

した。

しかし、モヤモヤしている私のところに友だちがあやまりに來たのです。それでも、最初はもう少し怒りの気持ちが残っていました。でも、勇気を出してあやまりに來た友だちの気持ちを受け入れて、私は「いいよ。」と言いました。その後も、その友だちとは何度もケンカをしてきたけれど、お互いに話し合うことで仲直りし、今でも良い関係で過ごせています。

この友だちは、考え方が私とは違うので、一緒にいてとてもおもしろいです。また、私のクラスにも、人を笑わせるのが上手な友だちや、優し



い友だちなど個性的な友だちがたくさんいます。色々な人がいて、みんな考え方が違うので、いっしょに過ごす時間がとても楽しいです。しかし、考え方がみんなちがうことで、時にぶつかり合ったり、お互いがはなれたりすることもあります。そうならないためにどうすればいいのでしょうか。私は普段から気をつけていることがあります。

一つ目は、聞き上手になることです。友だちの話を聞かなかったり、適当に答えたりすると、相手の考えや気持ちが変わらず、けんかの原因になることがあります。そこで、まずはよく話を聞いて、理解することが大切です。また、相手の話をしっかり聞くことでお互いが楽しい気持ちになれると思います。

二つ目は、自分の気持ちを相手にしっかりと伝

えることです。自分の思いをはっきりと言葉で伝えなければ、気持ちがうまく相手に伝わらず、誤解されてしまうかもしれません。だから、相手も自分も気持ち良く過ごすためには、自分の意見を相手にしっかりと伝えることがとても大切です。

私はもうすぐ中学生になります。そうすると、今よりも、もっとたくさんの人と出会うことになります。その中で私は今までの経験を生かして、たくさんの人と仲良くしていきたいです。そのためには、多くの人と話をし、お互いのことを知ろうとしたり、相手の立場になって考えたりしていききたいと思います。

# 言葉づかい

言葉は、時に人を傷つけます。それと同時に、たくさんの人を笑顔にすることもできます。人を傷つけると、その人の気持ちはとても苦しいです。人は、かたんに傷つくものです。たった一言だけで、仲間はずれになったり、命を落としてしまったりした人もたくさんいるのです。未来に何も見えなくなってしまうです。ニュースでも、言葉によるいじめが起きて悲しい結末になっていることがあります。最悪の場合は、命がなくなるのです。

私は、小学校五年生のときに、グループのみんなから、無視をされ続けていました。私は自分

が周りから無視されていることを知っていました。本当につらい人生だなと思いこみ、自分なんていなくなればいいと思ったこともありました。私と仲良くする人は、もういないと思うほどでした。でも、一つだけ反省することがありました。私は、五年生のとき、言葉づかいが、あまり良くなかったのです。だから、六年生になったら、人と仲良くできる言葉をたくさん使おうと思いました。そして、今、私は六年生。現在、私は、たくさんの人と仲良くできています。そのことがとてもうれしいのです。私がここまで元気でいられるのは、「たくさんの人を笑顔にする言

葉」であふれているからです。良い言葉をたくさん使うと、たくさんの人が笑顔になり、元気になります。五年生の自分は、言葉づかいが悪い、暗い性格でした。だから、周りともうまくいかなかったのだと、今となって思います。自分なんていなくなればいいのと思っていたのに、今とても楽しい毎日を送れています。何より、たくさんの友だちに囲まれている今が、とてもうれしいのです。言葉一つで、すべてが変わります。私自身も、周りの友だちの気持ちも、すべてが変わるのです。

これらのことから、私は、良い言葉には四つの種類があることを学びました。

「人がいい気持ちになる言葉」

「人を大切にする言葉」

「人を助ける言葉」

「どちらも、やさしい気持ちになる言葉」

きっと、もっと考えれば、良い種類の言葉が、たくさん見つかると思います。自分も相手も大切にできる良い言葉を、これからずっと探しながら生きていきたいです。人を大切にするということとは、きっと自分も大切にされるということだと思います。まずは、自分から正しく過ごしていこうと思います。



# 普通に接する

「人と人がよりよくなされる社会」、こういう言葉はよく耳にするし、私もとても大切なことだと思います。でも、「よりよくなされる」って、どうすることなのだろう。この夏休みに私は改めて考えてみました。考えているうちに、私の母の兄であるしんくんと遊んでいたことを思い出しました。

しんくんは、野球と演歌が大好きで、私の弟とドラゴンボールの話で盛り上がったたり、テレビを楽しそうに見たりしています。私たちが帰省すると玄関で出迎えてくれたり、一緒に遊んでくれたりします。私たちが泣いたり、怒ったりしたときは、誰よりも先にかけてくれて、とっても優しくしてくれます。小さい頃から仲良しです。

でも一つ小さい頃から不思議に思っていることがありました。だから小さいとき母に、

「しんくんはなんで会社で働いてないのかな。話すのもあんまり上手じゃないのはどうしてなのかな。」と尋ねたことがあります。すると母は、

「しんくんは、ダウン症候群という障がいがあるからだよ。でも働いていないわけではなくて、毎日作業所に行っているいろいろなものを作っているんだよ。」と教えてくれました。そのとき、「本当に障がいがあるのかな。」と思いました。小さい頃の私はピンとこ

なかったのです。いつも私たちと同じように一緒に楽しく過ごしているからです。障がいがあるといっても、何も違うないんじゃないかなと思いました。

ダウン症候群について調べてみると、二十一番染色体が通常より一本多く存在する先天性疾患で、身体的発達の遅延、特徴的な顔つき、軽度の知的障がい特徴だということが分かりました。私は「障がいがある

人」と聞いて、車いすに乗っていたり、寝たきりだったりする体が不自由な人を想像していました。けど、体が不自由な障がいだけでなく、いろいろな障がいがあるのだなと思いました。

しんくんの障がいのことを知ったけれど、小さい頃から一緒に過ごすしんくんのことを、私たちとやっばり変わらないんじゃないかなという思いは変わりませんでした。

でも今年の夏、みんなで旅行に行ったときに、しんくんが熱中症になってしまうということが起こりました。しんくんは、

「車の中にいてね。」

と言われていたので、ずっと車の中にいたのです。そのとき車のエアコンが効いていなくてとても暑かったのに、しんくんは何も言えなかったのです。私だったら、暑いから自分で車から出たり、暑いと伝えたりすることができけれど、しんくんは

「暑いから出て来て。」

と言われるまで、出て来ませんでした。この出来事があったとき、私は私たちと変わらないと思っていたし

しんくんだけど、思っていることを伝えられなくて困ることもあるんだなと思いました。私はこれからしんくんが困っていないか気にかけて、声をかけていこうと思いました。

障がいがある人と一言で言っても、車いすなど目で見て分かる障がいだけでなく、しんくんのような知的障がいや、情緒障がいなど様々な障がいがあります。障がいがあっても、私たちとあまり変わらないことも多いし、できることもたくさんあるので、私は今まで通り普通に接していこうと思います。でもそれだけでなく、誰かの困りに気づいたり、その困りに寄りそって迷わず助けたりできる人になりたいです。障がいがあるからという理由ではなく、誰に対しても同じだと思います。普通に接することの中に、相手のことを気づかう思いやりがあることが大切だと思うのです。そうすることで、「人とよりよくかわる」ことができる私になりたいです。

# おとうと

「あの子、足が悪いからベビーカーで来たんで。」

「あら、頭どうしたの。」

「なんで、ぼうし被っちょんの。頭痛いん。」

「足、どうしたんですか。」

「オムツは取れたんね。」

これらは、僕の弟に対して実際に投げかけられた言葉です。

僕の弟は、生まれつき障がいがあります。歩行が安定するように「短下肢装具<sup>たんかしそうぐ</sup>」という靴をはいています。また、転倒時の頭部の保護のために、ヘッドギアを被っています。環境によっては、車椅子を使用する時もあります。そして、日常的に「導尿<sup>どうにょう</sup>」という医療的ケアが必要です。僕にとっては見慣れた光景ですが、周りの人にとっては珍しいようです。ある日、

お店で車椅子に乗っていた弟も「なんか見られてるなあ。」と、小さいながらも視線を感じているようにした。

例えば、眼鏡や杖、ヘルメットであれば、弟のように横目で見られることはほとんどありません。弟の身につけているものも『弱い所をサポートして保護する』という役割としては同じなのに、周囲の目がこんなに違うのです。このような偏見がどうして生まれてしまうのだろうと、僕は考えました。原因は、知らないことにあると思いました。だから、偏見をなくす第一歩は知ってもらうことだと思います。そしてそのためには、いろんな人と交流する経験が必要だと思いました。正しい知識があれば、思いこみや決めつけがなくなるのではないのでしょうか。

僕の弟は、来年小学生になります。僕は、弟のことを周りの人たちに正しく知ってほしいです。弟には、僕や兄と同じように小学校生活を送って、必要な時には、人に手伝ってもらう力を身につけてほしいと思っています。それが、弟の生きる力につながるからです。

ところで、みなさんは「共生社会」という言葉を目にしたことはありませんか。共生社会とは言い換えると、全員参加型の社会のことです。僕は、共生社会の実現までの道のりはとても長く、言葉の一人歩きのようにさえ感じています。きっかけは、弟が入れるプール施設がほとんどないことからでした。弟は水遊びが大好きです。ですが、大抵の施設では「オムツが取れないお子様」や、「排泄の意思表示ができない人」は利用できないとなっているため、入ることができません。僕は、弟の困りのたった一つを目の当たりにしたのですが、まるで弟が疎外されているように感じずにはいられません。福祉センターにあるプール施設で、排泄物をもらってしまった障がいのある利用者が、プール利用禁止の扱いを受けた事例もありま

す。障がいのあるなしに関わらず、誰にでも失敗をすることはあります。それなのに『障がい者』のレッテルを貼られることで、分類されることが現実におこなわれています。プールの利用禁止については、差別的な対応ではないかと僕は思います。マルカバツの二択ではなく、排泄に配りよが必要な人のための開放日をつくったり、プールが複数あれば、場所を決めて利用するなどの工夫ができないのでしょうか。

母から聞いたのですが、テレビ番組で、障がいのある人が「内なる優生思想はなくならない」と話していたそうです。みなさんは、この言葉を聞いてどう思いますか。この言葉は、今の社会の姿そのものをあらわしているのではないかと僕は感じています。

「共に生きる社会」の実現にはみんなの力が必要です。これから大人になっていく僕たちが先頭になって、誰もが好きなことを選択し、自由に生きていける社会を目指したい。これからの未来は変えることが出来ると思っていて。



# 優しいうそ

ぼくは、「人権」とは何かと聞かれると、「差別」という言葉しか浮かびませんでした。どんな差別かと聞かれても困ってしまいました。

そこで、調べてみると「人権」とは「人が人として社会の中で自由に考え、自由に行動し、幸せに暮らせる権利」「すべての人が生まれながらに持っている権利」と書かれていました。これだけでは正直分かりませんでした。調べながら、お母さんと話していると、難しくて分からないと嫌になっていたばかりにも身近に感じる事ができる人権がありました。それは、新しい人権の一つの「自己決定権」でした。自己決定権は、「自分の生き方・生活スタイルについて、自分自身が自由に決定する権利で、さまざまな分野において自己決定権に関わる場面がある。特に多く見られるのが医療の分野である」と書かれていました。例えば、手術をするか薬で治すか、入院するか家で治療するかといった治療方針などの判断は、今まで医師や病院に任せることがありましたが、患者自身が自分の責任において選

択すること（インフォームド・コンセント）が増えてきたというのを見て、ぼくは、亡くなったおじいちゃんのことを思い出しました。

ぼくのおじいちゃんは、ぼくが生まれた時には、若天性アルツハイマー病にかかっていました。お母さんの話だと、若天性は進行が早く、ぼくのこととも分らなくなる日が来るかもしれないと言われていました。でもおじいちゃんは、たくさんのことを忘れていたけど、ぼくや家族のことはいつ会っても覚えていてくれました。そんなおじいちゃんは、ぼくが三年生の時、末期の胃がんになってしまいました。何もなかったら余命二ヶ月、治療しても余命半年だったそうです。

おじいちゃんは、アルツハイマーのせいでもともと自分の病気のことを理解していたのか、今となっては分からないそうです。おばあちゃんやお母さん、伯母さんがおじいちゃんの気持ちを聞きながら、どこまで判断できているかを先生と話しながら治療方針を決めていたと聞いて、お母さんたちは、おじい



ちゃんの残された時間をおじいちゃんの望む生き方ができるように考えていたと知りました。

ぼくがよく覚えているのは、

「オレは入院はせん。」

とおじいちゃんと言っていたことです。治療の点滴もあって、ご飯が食べれないから栄養の点滴もしないといけなくて、入院しないと大変な状況でした。家に介護ヘルパーさんが来るのも嫌がりました。ぼくは、何もできないし、お母さんたちはとても大変だと分かってはいたけど、おじいちゃんがそう言うなら仕方ないと思いました。

でも、ぼくは介護の現実には甘くないと知りました。まだ若いおばあちゃんは仕事をしていて、家族みんなそれぞれの生活があって、小学生のぼくは、お母さんがいないと正直困ります。みんなで協力しながらも、おじいちゃんが一人になる時間ができてしまうのです。どうしたらいいかをみんなで考えました。そして、たどり着いたのは介護用の見守りカメラでした。転がっていないかな。倒れていないかな。家で仕事をしているお母さんが見守ることができました。でも、誰でも見られているのは嫌なことだと思います。ぼくも嫌です。おじいちゃんの「オレは家にいたい」という気持ちを尊重してあげるためには仕方ないことでした。忘れてしまうおじいちゃんは、ある日、

「これは何か？」

と、何度も聞いてきます。

「これは電波をひろう機械だよ。」

と、お母さんは答えました。優しいうそもあるんだよとお母さんが説明してくれました。その日、おじいちゃんと会話をしています、

「じいじ、元気になったらどこかに遊びに行こうな。」

ぼくは、初めて優しいうそをつきました。おじいちゃんは、

「じいじはもうダメやあ。」

と言いながら、笑っていました。

この作文を書くためだったけど、お母さんと「介護」に関する人権について調べて、たくさん話して、アルツハイマーだろうとがんだらうと、生きている限り「自分はどうしたいか」を主張する権利があると分かりました。そして、介護する側の最低限の人権も守られないといけないことも知りました。

おじいちゃんは、たくさん無理を言っただし、病気でもとてもつらかったと思うけど、幸せだったならいいなと思いました。ぼくたちのたくさんついた優しいうそもきつとおじいちゃんには、怒ってないと思います。

# 最期の人権

私の祖父は祖母と一緒に四国へお遍路巡りに行っていました。しかし、二日目に祖父に体がきつい、食べ物も食べられない、お酒も飲めない、便が白いという複数の症状が出たため、急ぎよ、帰宅しました。すると、祖父は神経内分泌癌という珍しい病気になっていて進行していました。医者は祖父に「治療できない状態で三年生きる可能性が五十パーセントです。」と説明しました。しかし、祖父がトイレに行っている時に医者は「本人には三年と言いましたが本当は半年でしょう。」と祖母に説明したそうです。祖母は癌ということは知っていたけれども、そんなにも進行しているとは思わなかったと言っていました。私は、祖父が癌になったことを母から聞いた時、ショックという気持ちもあったけれど、それよりも癌になったことにびっくりしました。

祖父は抗がん剤治療を試みましたが効果がなく、本人の希望で自宅で過ごすことになりました。それから、祖父がしたいことをしたそうです。祖父は庭師の仕事をしていました。痛

みに耐えながらも、私の家の庭の手入れをしてくれました。それが最後の仕事になったそうです。思い出に家族写真も撮りました。

その後は、祖父の体調は悪化していく一方でした。癌による強い痛みが出てきた時は痛み止めを飲み、庭を歩いたり散歩をしたりしていました。私は家族写真を撮った時に元気だったので、平気、まだ大丈夫だと思っていました。それから、祖父は常に痛み止めを飲んで過ごしていました。しかし、十月の中旬ごろからとうとうひどくなってきました。それから寝たきりになり、ご飯も食べられなくなりました。そして、母から聞いたのは、「もう長く生きられない」ということでした。私は、家族写真を撮った時に大丈夫だと思ったのは間違いだと気づきました。

十一月からは、徐々に水も飲めなくなっていました。自分でトイレに行ったりすることもできなくなっていました。しかも、病気が分かってから痩せていったので十一月にはすっかり痩せこけていました。十一月過ぎからは祖母の姿が見えなく

なるたび薬の影響や病気の進行で、祖父は赤ちゃんみたいになる。「かーちゃん、かーちゃん」と呼んでいたそうです。その時、おばは「よくけんかもしていたけどやっぱり祖母が一番なんだなと思った。」と言っていました。私は、祖父があまりしゃべらない人だったので余計びっくりしました。

そして、十一月の中旬に医者からこんな話が出てきました。それは、

「最期の薬を打ちますか。それを飲んだら痛みを感じなくなるかわりに、動けなくなって会話もできなくなり、二週間以内には亡くなります。」

という話でした。最初は、祖父なしで、家族の仕事のスケジュールに合わせて決めた葬儀の日から逆算して、十一月の終わりぐらいに打つという話をしていたそうです。しかし、私の母が、

「お父さんは、まだ話が分かんと思うから、お父さんなしで決めるんじゃないくて、お父さんに聞いてみた方が良いんじゃない。」

といい、祖父に聞くことになりました。十一月十三日に祖父が薬をのどにつまらせました。それを見た祖母が薬すら飲めない状況を目の当たりにし、もう最期の薬を使う時が来たなと思ったので家族全員を呼び、祖父にたずねました。

「じいちゃん、最期の薬を使うかえ？」

そういうと、祖父はうなだれたので続けて、

「まだ、頑張れるかえ？」

と聞きました。すると祖父は首を横に振りしました。その瞬間、家族全員が涙をながしました。そして、その日、注射を打ちました。その注射はボタン式で家族が好きなタイミングで押し、打つことができるというものでした。祖母は打つ時、苦しむ姿は見たくないけれど、自分が祖父の寿命を短くしているような気がして、とても複雑な気持ちだったそうです。その四日後、家族が見守る中、静かに亡くなっていきました。

今年は、祖父の初盆です。私は祖母に

「じいちゃんの最期の人権は守られたかな？」

とたずねました。祖母は、

「自分のした判断に後悔はなく、じいちゃんの人権は守られたと思うている、そう信じているよ。」

と言っていました。私は、もう今は祖父がいないので聞くことはできないけれど、訪問看護師やおば、おじ、母、祖母など、祖父に関わる人が、祖父らしい最期の迎え方についてみんなで考え、協力し合った話を聞いて、祖父は幸せな最期を迎えられたのではないかと思いました。祖父の死は私にとって、改めて人権を守るとはどういうことなのかを考える出来事となりました。

# 命を愛する「じと」

私が、小学二年生のときのことです。ある日、私と兄は母に呼ばれました。そこで母に言われました。

「実は、あなた達に弟が妹ができたよ。」

私と兄は、最初はその言葉の意味が分かりませんでした。でも、説明されるうちに段々と意味を理解しました。

当時、私は兄が友達と遊んでいても仲間に入れてもらえず、いつも一人で遊んでいたため、ずっと自分より下の子である弟が妹が欲しいと思っていました。そのため、私は、理解した後、大号泣しながら、

「ほんとに？」

という質問をくり返していました。しばらく泣いた後は、母と、スイッチのゲームのカセットを買ってもらう代わりに、私と兄とで母の手伝いを頑張るという約束をしました。私は、とてもうれしくて、学校の宿題が終わったら、すぐに母のもとに行って手伝いをしていました。

そして、三年生の夏、弟が産まれてきてくれました。母のいる産婦人科に行ったとき、私は初めて産まれて数日の赤ちゃんを見ました。

「だっこしてみる？」

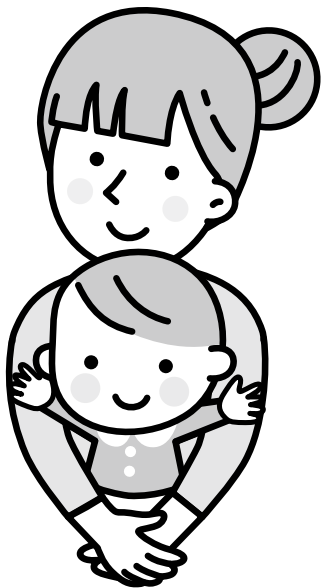
と聞かれ、私はうれしさのあまり大きくうなずき、まだ首のすわっていない赤ちゃんをだっこしました。だっこしてみた感想は、思ったよりも重くほんのりあたたかかったです。私はこのとき、これが一つの命のあたたかさであり、重さなんだと思いました。実際、命はお金では買うことのできない、とても大事なものです。そして、このとき、すでに弟には人権があたえられています。そのため、弟を家族として迎え入れる私達は、弟が幸せに生きられるようにしっかりと責任をもってお世話をしなければいけません。これは、どこの家庭でも一緒だと思います。

私は、親になるのなら、授かった子を責任を持って育て、そ

の子が幸せになれる道を歩めるようにすることが大切だと思います。育てていく覚悟がないならば産むなど言いたいわけではありません。環境的に、金銭的、年齢的に、育てることができない場合は、児童養護施設に引きとってもらうことも可能です。しかし、虐待、育児放棄など、命を何とも思っていない行動をする親が世間には存在します。私は、このようなニュースを見るたび、とても胸が痛みます。私は、弟が家で過ごせるようになってから、ずっと弟のそばにいて、一緒に遊んだり、ご飯をあげたり、お風呂に入れてあげたりと、たくさん母の手伝いをして過ごしてきました。車で出かけるときも、ベビーカーに乗った弟の隣に座り、泣けばあやし、何かあればすぐに母に報告していました。年が離れているのもあり、母は幼い弟の世話につきっきりでしたが、私は寂しいとは思いませんでした。それよりも弟と遊びたかったからです。幼くして、命の成長を一から見るという経験は、私にとって、とても貴重な体験であり、大切な時間でもあります。弟が成長し、しゃべったり、歩いたりすることができるようになってからは、弟のそばにいる時間ももっと増えました。なぜなら、自分のことを、お姉ちゃんと認識し「ねえね」と呼んでもらうためです。今、弟は、私のことを「ねえね」と呼んでくれます。一方、

「にいこ」と呼んでももらえるようにしなかった兄は名前を呼び捨てで呼ばれています。赤ちゃんは、最初に覚えた呼び名で今後その人を呼ぶというおもしろいことが分かりました。

今、私の弟は五歳です。私は弟がどういう行動をよくしていたか、どのような物事を、好んだり嫌ったりしてきたのが、きちんと記憶の中にあります。なぜなら、生まれてきてから、ずっと成長を見守ってきたからであり、弟を本当に愛しているからです。私はこれからも、同じ家族として弟の面倒を見るし、たくさん愛情を注いでいきます。そして、弟がこの世に誕生してから、ずっとそばでできることが増えていく日々を見守ってきた五年間や、これからの日々の経験を活かして、保育士などの将来の夢を叶えたいと思います。また、自分が母親として一つの命を授かったときに、自分の子どもを幸せな道へ導いてあげられるようにしていきたいと思っています。



# 迅くん、生まれてきてくれてありがとう

深夜一時過ぎ、携帯電話が鳴りました。

「弟が生まれたよ!」という父からのラインでした。私はその時、本当に心からほっとしました。命にかかわる出産です。産むまでの母の大変な苦労を私は知っていました。

弟の誕生は、私たち家族にとって、この上ない喜びとなりました。エコー写真でしか見たことのない赤ちゃんが、弟として目の前に現れたのです。命の不思議さと命の重みを感じました。これが、私が人権作文を書くことと思ったきっかけです。

私のきょうだい構成は、二歳年下の弟に、十歳離れた妹、それに今回誕生した二人目の弟の四人です。こんな年の差だからこそ、人が生まれるまでの母の苦労を近くで見ることができました。母は、妊娠がわかってから出産までの期間は、食べたいものも、行きたい場所も制限し、お腹の子どもを第一に考え行動してきました。弟は生まれてから、多くの人にお世話されながら育っていきます。私は、弟や妹が生まれてから、我慢しなければならぬこともあったし、嫌なこともありました。し

かし、小さなきょうだいが成長していくのを見るのが楽しくもありました。ついこの前生まれた妹も、今は三歳です。この三年間、「何で私が・・・。」と妹の存在を疎ましく思った時もありました。我慢するのが嫌で関わりたくないと思うこともありましたが、でも、今となると笑顔で駆け寄ってくる妹は、かわいく大切な存在です。一番下の弟もきっとそうになっていくと思います。私にとって弟と妹はかけがえのない存在です。

しかし、世界中の子どもたちの命がみんな大切にされているのでしょうか。ニュースでは、悲惨な様子が日々報道されています。パレスチナとイスラエル、ウクライナとロシアでは戦争や紛争が起こっています。多くの罪なき人々の命が失われています。子どもたちは教育をともに受けられなかったり、他国に逃れたり、命を奪われたりしています。あまりにも理不尽です。スクスクと愛されながら育っていくはずなのに・・・日本で育つ命と他国で育つ命にこんな違いがあってもいいのでしょうか。いいわけないです。



もっと身近で考えると、親から虐待される子どもたちもいます。戦争や紛争、虐待によって亡くなる子どもたち。私や弟のような環境や育てられ方では、大きな差があります。でも、その違いは本当にあつてよいのでしょうか。弟が産まれた時とほぼ同時期に、パレスチナで生後四日目の双子の赤ちゃんが空爆で死んでしまったというニュースを目にしました。双子の赤ちゃんが産まれた時、お母さんもお父さんも祖父母も大喜びしたことでしょう。服もおもちゃも乗り物も買って、これからも頑張ろうと意気込んでいたかもしれません。それなのに、命を軽く見るかのように、自分たちの得のために容赦なく人の命を奪う。敵国には敵国の正義があるのかもしれませんが。それでも、私は、罪なき人々の命を奪うのは、どうしても許すことができません。新しく生まれた命が、こつこつ簡単に失われることに私は怒りを感じました。生まれてくる国も家も環境も選べないというのに、罪一つない子どもたちが危険な目に遭い、いろんなものを奪われています。

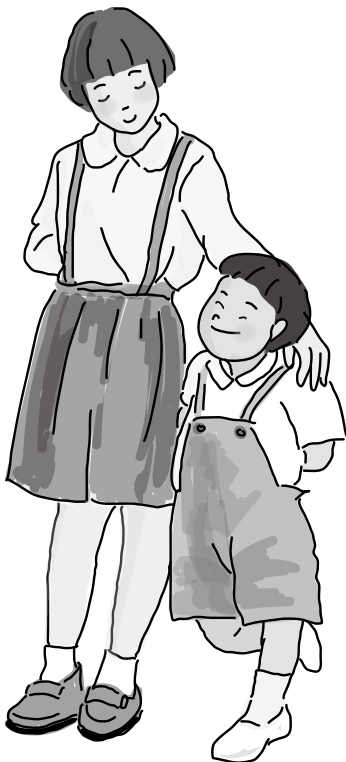
今まで私は、祖父母に対してすごく反抗的でした。しかし、祖父母の幼い弟への接し方を見ると、私も同じように大切に育てられたのだということに気づきました。わけもなく反抗していた自分が恥ずかしくなりました。自分一人では気づけなかったけれど、妹や弟の成長を通して、感謝の気持ちがわいて

きました。私も周りの人も大事に育てられた大切な命なのだということが分かりました。

日常生活の中でも、不用意な言葉や態度で人を傷つけることがあります。命について考えることができた私は、少し立ち止まって考えてみたり、考え直してみたりしながら、身の回りの人の命を大切にしていきたいと思うようになりました。

今、私は学年の専門委員長をすることになりました。弟の誕生で命の重みは、みんな一緒だということを学びました。私の周りにいる学年のみんなの命の大切さを感じながら、その人の意見や思いも大切にしていきたいと思っています。もっと視野を広げて実践できるよう頑張っていきたいです。

「迅くん、生まれてきてくれてありがとう。」



# 「普通」とは何か

突然だが、皆さんはLGBTQ+というものを知っているだろうか。

LGBTQ+というのは、女性同性愛者を表す「レズビアン」、男性同性愛者を表す「ゲイ」、両性愛者を表す「バイセクシャル」、性自認が出生時に割り当てられた性別と異なる人を表す「トランスジェンダー」、性自認や性的指向を決められない、迷っている人を表す「クィア」「クエスチョニング」、そしてこの五つには当てはまらない性的マイノリティの人を「+」でまとめて指す言葉だ。私はLGBTQ+のうち+にあてはまる「ノンバイナリー」だ。「ノンバイナリー」は自身の性自認と性表現を男性・女性という二つの枠組みに当てはめない人を表す言葉だ。他にも+に当てはまるのは、どの性にも恋愛感情を抱かない人を表す「アセクシャル」などがある。

LGBTQ+という言葉は最近、テレビなどで取り上げられていることもあり、耳にしたことがある人も多いだろう。今や

LGBTQ+の人は十三人に一人いると言われている。これは簡単に考えると四十人のクラスに二〜三人はLGBTQ+の人がいるということになる。友だちにLGBTQ+の人がいたっておかしくない。だが、私は今までLGBTQ+の人に一度も出会ったことがない。

それはなぜだろうか。私はLGBTQ+がまだ一般的ではなく、「カミングアウト」が難しいからだと考える。「カミングアウト」とは、自らの性的指向、恋愛の指向、性自認を自己開示することを表す言葉だ。

トランスジェンダーやレズビアン、ゲイなどはなんとなく聞いたことがある人も多いだろう。しかし、クィアやノンバイナリーなどは知名度が低い。また、トランスジェンダーやレズビアン、ゲイについても、どのようなものが詳しくわかる人は少ないと感じている。LGBTQ+が一般的ではないと、自分がカミングアウトしても理解してもらえない可能性が高い。実



際、LGBTQ+をカミングアウトしたが、理解されず、いじめを受けるようになったり、からかわれるようになったり、最悪の場合、自ら命を絶ってしまうこともあるそう。それが怖くてカミングアウトできないのが現状だと思う。私もそれが理由でほとんどの人にカミングアウトをしていない。

それなら、LGBTQ+をもっと一般的にしていくためにはどうすればよいのだろうか。私は学校でLGBTQ+の授業をするとか、LGBTQ+の当事者の方からのお話を実際に聞くことが効果的だと思う。なぜなら、LGBTQ+をもっと身近にすることができるし、正しい知識を得ることができるからだ。また、LGBTQ+の人がどんなことで嫌だと思うかを知ることがLGBTQ+の人への理解、そしていじめ防止にもつながると思う。

ひとまとまりにLGBTQ+といっても、嫌だと思うことは人それぞれ。トランスジェンダーや同性愛者ならではの嫌だと感じることもあるだろう。ノンバイナリーの私は「女の子だから」とか「女の子らしくしなさい」と言われることが嫌だ。他にも制服が男女で分かれているのも納得できない。最近はスカートかズボンかを選べるようになっていて。もちろんそれは嬉しい。しかし男女で分かれていることに変わりはない。男女

で制服のデザインが違うことで、ただ通りすがったただけの人にも女性だと思われてしまう。

自身の体の性別と心の性別が一致している人からすれば何が嫌なんだろうと思うかもしれない。しかし私からしたらとても嫌なことなのだ。このようなことが理解されないのもLGBTQ+が一般的になっていないからだと思ってしまう。

今の世の中ではLGBTQ+の人たちに対して、「普通じゃなくて気持ち悪い」とか「なんで普通にしないの?」とか言う人がいる。でも「普通」とはなんなのだろうか。多数派の人が普通で少数派の人は普通ではないのだろうか。多数派、少数派で言えば、右利きの人と左利きの人もあてはまる。では、左利きの人は少数派だから普通ではなくておかしいと言われているのだろうか。私は左利きだが、「おかしい」や「普通ではない」などと言われたことは一度もない。「へー左利きなんだ」と言われるぐらいだ。昔ならともかく、今左利きの人を否定するような人はほとんどいないだろう。性別についても同じことだと思う。異性を好きになることだけが普通ではないし、男性か女性かしか性別がないわけでもない。それが当たり前になることが日本、そして世界の目標なのではないだろうか。

# 「自分らしさ」が生きる未来へ

近年、ひとりひとりの「自分らしさ」を認め合うことが重視されるようになりました。私の通う中学校では、一つ下の学年から、ズボンとスカートなどを自由に選べる標準服が導入されています。身近なところで変化があったのをきっかけに、私は、私自身の「自分らしさ」について考えてみました。すると、前に同級生から、「真面目な○○ちゃんらしいね」と言われたことを思い出しました。相手は私をほめてくれていたようです。しかし、私はこの言葉に違和感を感じていました。

私には、学校でありのままの気持ちをせず、人前を取り繕ってしまう癖があります。小学一年生の頃、人に怒られることが怖くて「学校ではできる限り真面目に振る舞おう」と考えたのが始まりでした。その意識が私の中に浸透すると同時に、周囲で、私に対する「真面目な人」という印象が強まり、「真面目な○○ちゃんらしいね」という言葉が出たのだと思います。ただ、私にとって「自分らしい私」は、家にいる時の素の私です。素の私は、アニメが大好きでマイペースで、学校での

姿とは全く違います。だけど、私はこの姿に「自分らしさ」を感じています。私が学校で「真面目な」姿を見せているのは事実ですが、その姿を「○○ちゃんらしいね」と言われると、複雑な気持ちになってしまいます。

私と同じように、周囲に見せづらい一面や事情などを持つ人は、意外に少なくないかもしれません。その人自身のことから、その人の周りのことまで、誰しも様々な事情を抱え、それとうまく付き合う努力をしているのではないかと感じます。だからこそ、互いに、表立って見えるものが相手の全てと決めつけない心がけが必要だと思います。相手が自分に見せてくれている一面だけでなく、その裏にある気持ちにも意識を傾けられるような、心の余裕を持つことを大切にしたいです。

一方で、「真面目な○○ちゃんらしいね」と言ってくれた同級生の視点に立ってみると、この言葉は、あくまでも私をほめるためのものでした。それを素直に受け取れなかったのは、元を辿れば、私が素の姿を隠していたせいです。私はだんだん、

「今まで自分は勝手な理由で周囲をだましてきたのではないか」と罪悪感を覚えるようになりました。学校で「いいところ見つけ」の活動が増えたことも相まって、「学校でも取り繕わず自分らしい私を見せたい」と感じ、中学校進学を機に変わろうと試みました。けれども、同じ小学校出身の人が多いの自分を分の中で言い訳にしまい、目立ったことはできませんでした。小学校時代の私を知る人にとって、その頃の印象は私と接する時の前提で、小学校を卒業しても簡単には消えません。中学校に上がる前は、環境が変われば都合の悪いことは何でもリセットされる気がしていました。しかし、それは誤解でした。自分の想像の甘さ、勇気のなさを痛感すると、全身がぞっとしました。

その時、ふと頭に浮かんだのは、性に関してカミングアウトした芸能人のことです。彼は、テレビ番組で見る限り、生きづらさを感じているとは思えませんでした。それでも彼は、世間のイメージに屈せず、抱え込んできた事情を公表しました。人に出せない一面を持っていた点では私と同じでも、秘めた思いを表に出す勇気は、私にはなかったものです。本当に強い人だなと心から尊敬できます。

その芸能人は、自分らしく生きるべく、自ら行動しました。私も、彼のように一歩踏み出し、自分らしくいられる場所を

増やしたいと考えています。そのためには、まず自分で自分のよき理解者になることです。隠してきた素の私も、学校でみんなに見てもらっている私も、今の私をつくるかけがえのない要素であることには違いありません。誇れるほどのものではなくとも、もう少しは自信を持って肯定したいです。それができれば、ありのままの姿を明かす勇気も出てくる気がします。

また、私だけでなく、私の周りの人たちのその人らしさも大切にしようと思います。私の目に映っている姿が、その人にとって本当に「自分らしい」姿とは限りません。先入観を押しつけず、相手のバックグラウンドに思いを馳せることができる想像力を持ちたいです。そして、もし誰かから、普段は見えない一面を打ち明けられても、寛大に受け入れ、その人の勇気と私への信頼に感謝したいです。

様々な人や個性と共に、自分らしい姿で生きていくためには、自分のありのままの気持ちを伝える勇気と、それを受け止めてくれる周囲の優しさがが必要です。幸い、私の側には頼れる家族や友達がいます。心強い仲間の力も借りつつ、私は私にできることをすすめていくつもりです。その先に、ひとりひとりの「自分らしさ」を十分に発揮し、みんなで尊重し、さらに生かしていけるような、温かい未来が繋がっているといいなと思います。

# 灰色と青

私はアーティストの米津玄師の大ファンである。小学三年生の時に母の影響を受けて彼の歌に興味を持つようになった。「Lemon」「KICK BACK」「灰色と青」といった数々の名曲を生み出した米津さんだが、実はある障がいを抱えていると公表している。

それは『高機能自閉症』という発達障がいだ。文部科学省による定義では「高機能自閉症とは、三歳くらいまでに現れ、①他人とは社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障がいである自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。」と示されている。私は、米津さんがこの障がいであることを知ったとき、「こんなに優れた才能を持っている人がまさか障がいを持っていたとは…」と驚いた。私自身も幼少期に「発達障がいの疑いがある」と言われたことを両親から聞かされていたからだ。

母から聞いた話によれば、一歳半の検診時に発語の遅れを指

摘され、二歳になり支援機関への相談をすすめられた。二歳半頃になっても発語の遅れや目線が合わないなどの特徴があり、三歳まで保健所や支援機関に親子で通った。母は言葉を引き出す機会、私は他の子どもと触れ合う機会を通じた支援を受けたが、三歳児検診でも「発語は出来てきたが、まだ目線が合わない、こだわりが強い」と指摘された。この頃の私は、まだ文字が読めなかったが、誕生日プレゼントで買ってくれた大好きな仮面ライダーの図鑑で母がライダーの名前を教えると、瞬く間にすべて覚えたという。そして、私自身も考えてみれば現在に至るまで、仮面ライダー好きは変わっておらず、米津さんの歌も含め、好きなものにこだわるという性格は当てはまっている。

その後、四歳になるまで、言葉や発達に不安のある親子向け通所事業『にこにこルーム』に通った。幼稚園の頃と同じように他の人との交流や生活習慣を学び、母は親同士の悩みの共有や支援を受けたという。一緒に学ぶ友達には障がいを持った人もいたが、私は一緒に楽しく学び、学んだ思い出しが残ってい

ない。

年中から幼稚園に入り、言葉はある程度話せるようになったが、まだ情緒や行動面、コミュニケーションに不安があり、年中の途中から療育センターにも通うようになった。療育の検査では「視覚と聴覚に秀でている部分があるが、体幹や基本的な運動能力が弱い。得意不得意が極端」と言われ、医師から「自閉症スペクトラムの疑い」と告げられたようだ。実際に幼稚園では、他の人と違う行動をして困らせることも多々あったらしい。それでも、私は幼稚園での生活や療育を通じ、徐々にではあるが「他の人と同じこと」ができるようになっていった。それは当時の両親や先生からもほめてもらったことで、今でもはっきり覚えている。特に幼稚園最後の運動会で踊ったエイサーは、私自身も「一緒に演じられた」という達成感と自信が持て、両親にも「すごい」とほめてもらえ誇らしく思えた。

小学校の入学前、両親は小学校の校長先生に私の発達障がい の疑いを伝え「他の人と同じクラスに入って大丈夫でしょうか。」と相談をして、校長先生から「様子を見ましょう。私も 気にかけておきます。」と言ってもらったそうで、無事小学校に入学することができた。

今思えば自分でも分かるのだが、小学校一年生のときから『目立ちたがり』で、自分から発表したがあったり、発表する

ときも教壇に出ようとして先生に注意されることもあったようだ。それでも、私は学校に行くのが楽しかったし、両親や先生も私がクラスに溶け込んでいる様子に「心配ない」と思ってくれていたようだ。ただ、小学校一年生の後半から五年生まで、珠算を習い、最終的に日商一級まで合格できたのだが、級が上がるにつれ難しくなり、思うように出来ないときに自分の腕や頭を叩くなどの自傷行為をして制止されることもあり、四年生の時に母から「発達障がいの疑い」と告げられた。正式に診断されたわけではないので、グレーゾーンだ。しかし、私は日常生活に不便を感じることもないし、何歳の時も良い仲間恵まれ、学校生活も楽しく過ごしている。

そして中学校三年生の現在、私は『目立ちたがり』を自負している。小学校三年生で米津さんの歌を聞いて以来、人前で歌うことが好きだし、人を楽しませることが好きだ。仲間から「面白い」「楽しい」と言ってもらえるのが嬉しい。だから今の私は将来芸能人になりたいと思っている。叶うか分からないが、夢は持ち続けたい。

今でも私は自虐的なことを言うことがあるし、得意不得意も激しい。だが、それが自分の個性なのだと思っているし、両親もそう言っている。人は十人十色。好きな色は青だが、私の色がグレーなら、それでもいい。

# イスラム教と私

「まだ子供なのに断食をしないといけないなんてかわいそう」私はラマダン中に祖母から言われた一言が悲しいと思いました。

私にはインドネシア人の父と日本人の母がいます。両親はムスリム（イスラム教徒）で、私と妹もムスリムです。イスラム教は世界三大宗教の一つでもあり、日本経済新聞によると「ムスリムは約十六億人で世界人口の二十三パーセントを占めている」といわれています。しかし、日本ではあまり理解されていないことがあります。生活について理解してほしいと思います。

ある日、家族と昼食を食べに行くことになりました。しかし、私たちは断食中であつたため、食事を断りました。断食とは、イスラム暦の九月から約一ヶ月間行われます。一日の中で日の出から日没まで飲食をしません。そのことを家族に説明すると、祖母は「まだ子供なのにかわいそう」と言いました。「かわいそう」と心配して言っているのは分かるけれど、少し

否定された気持ちになりました。

断食はラマダンとも言います。ラマダンはいろんな目的があつて行われています。ラマダン中は、嘘をつくことや揉め事を起こすことも禁止されています。これは「欲望や悪から遠ざける」ためです。その他にも、「恵まれない人の気持ちを理解する」や「神からの恵みに感謝をする」などがあります。このようなことをもう少し知ってほしいと思いました。

私は中学校一年生のときの社会で宗教についての授業で、あるクラスメイトが、「イスラム教徒はテロリスト」と話して、なぜそのように思うのか疑問に思いました。たしかに、アメリカで起きた九・一一同時多発テロ事件、今でも続いている紛争はイスラム組織が関わっているけれど、ムスリムの全ての人がそうではないということを知ってほしいです。よく組織の人たちが「暴力的なものがイスラムの教え」と言いますが、イスラムの教えでは無条件に人を傷つけて良いという決まりはありません。私はこのような誤解や、面白半分でこんなことを言うの

はやめてほしいと思いました。

私はこのように「断食」や「テロリスト」以外にも「食事」や「服装」でも少し誤解をしているなと思うことがあります。

「食事」では豚肉が食べられないため、学校の給食にはお弁当を持って行きます。最初はみんな「アレルギーなの」と聞いてきて、「宗教で豚肉が食べられない」と伝えると「なんで食べられないの」と聞かれたことがあります。簡単に理解できないことは何度もありました。インドネシアにいた頃も「なぜムスリム以外の人は豚肉を食べるの」と友達から聞かれたことがあります、「普通」だと思っていたことが他の人から見ると理解しにくいこともあるということを知りました。

「服装」ではヒジャブという布で頭髮を隠すことです。私は日本では被っていないけれど、インドネシアでは被ります。被りものというと頭から足先まで見せないイメージが多く学校では「顔も手も見えないからあやしく見える」という人が多いけれど、ムスリムの中でも厳しいところでは「ブルカ」という頭から足の先まで隠し、目元も隠す被りものや目元だけ出す「ニカブ」を着ています。ムスリムの中でもあまり厳しくない場所の人はスカーフで頭を覆う「ヒジャブ」というものをしていきます。女性が被りものをする理由は、「美しいところは人に見せないように」というイスラムの教えがあるからです。しかし、

ムスリムでも被りものを着用していない人もいて、見た目では分からない人もいます。私はこのように被りものをしているマインスなイメージが無くなってほしいと思います。そして、ムスリムは被りものをしていない人もいるということを知ってほしいと思います。

私はこのように、イスラム教で決められていることは、神や自分達のためだけではなく人のためでもあるということを知ってほしいと思います。

私は、日本で仏教の何宗か気にしていないように、イスラム教のマインスなイメージが無くなってほしいと思います。これから日本は人口が減っていき、多文化社会になるといわれているので、宗教以外でも生活の中で意識していないときに友達を傷つける発言をしないよう気をつけたいと思います。そして、自分が気づいていないときに、差別をしないように気をつけたいです。日本では多様性社会といわれているので、日常生活や学校でも宗教のことを理解してくれる人が増えて欲しいと思います。一番理解してほしいのは、祖母のような考えの人ですが、まずは自分から丁寧に説明するようにしたいです。



# 作文を掲載させていただいた方（あいうえお順）

赤井 琴音（敷戸小学校）

河野 隆翼（明治小学校）

松田 奈々（上野ヶ丘中学校）

麻生 千尋（植田中学校）

後藤 瞭太（吉野小学校）

丸山 優翔（明野中学校）

安東 弥希（吉野小学校）

佐藤 花楓（大分豊府中学校）

三浦 木花（植田小学校）

岩村 莉帆（明野東小学校）

佐藤 志保（鶴崎小学校）

右田 蓮（滝尾中学校）

小野 来望（城南小学校）

染田 彩羽（日岡小学校）

村上 実結（碩田学園）

片山 ひかり（松岡小学校）

西村 優芽（碩田学園）

森田 朝陽（明野西小学校）

河野 優（田尻小学校）

野口 海和（碩田学園）

山田 詩世（三佐小学校）

河南 真季（明野東小学校）

平田 しほり（敷戸小学校）

沓掛 珠理奈（明治小学校）

深川 花心（大分豊府中学校）

黒野 音華（高田小学校）

藤澤 茉広（金池小学校）